伊東静雄

杉本秀太郎

近代日本詩

近代日本詩人選 18

伊東静雄

杉本秀太郎

筑摩書房

杉本秀太郎（すぎもとひでたろう）
一九三一年京都に生れる。京都大学文学部仏文科卒。京都女子大学教授。著書に、『大田垣蓮月』（淡交社、のち小沢書店）、『洛中生息』『続洛中生息』『回り道』（みすず書房）、『文学の紋帖』（構想社）、『文学演技』『西窓のあかり』（筑摩書房）、訳書に、アラン『音楽家訪問』（岩波文庫）、ロスタン『R・シュトラウス』（音楽之友社）、ジュリアン『世紀末の夢』（白水社）などがある。

伊東静雄　近代日本詩人選18
一九八五年七月五日　初版第一刷発行

著者　杉本秀太郎
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号一〇一―九一
電話　〇三（二九一）七六五一（営業）
〇三（二九四）六七一一（編集）
振替東京六―四一二三

印刷　明和印刷　製本　和田製本
©1985 Hidetaro Sugimoto
0392-13918-4604

目

次

序　三
晴れた日に　一五
曠野の歌　一九
私は強ひられる——　二五
氷れる谷間　二九
新世界のキィノー　三五
田舎道にて　三七
真昼の休息　四〇
帰郷者　四六
同反歌　四九
冷めたい場所で　五〇
海水浴　五八
わがひとに与ふる哀歌　六〇
静かなクセニエ　七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

咏　唱	一八六
四月の風	一八九
即　興	一九六
秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る	二〇二
咏　唱	二一三
有明海の思ひ出	二二四
（読人不知）	二二五
かの微笑のひとを呼ばむ	二二七
病院の患者の歌	二二〇
行つて　お前のその憂愁の深さのほどに	二二六
河辺の歌	二四〇
漂　泊	二五二
寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ	二六〇
鶯	二六二
（読人不知）	二六八

年　譜　二七一
テクスト及び参考文献　二七三
詩集『わがひとに与ふる哀歌』各篇の想定擬作者および発表誌一覧　二七五
あとがき　二七七

函装画＝加納光於《作品》（1979　部分）

伊東静雄

按ずるに、すべて生あるものは発展と萎縮、離巣と回帰をくり返すほかなしとすれば、人の心また然りといえない道理があるだろうか。

ヘルダーリン『ヒュペーリオン』

序

長いためらいの期間と、そのあいだにむなしく試みられた一再ならずの出発準備が、ある日、ついに本当の出発によって、うそのように過去のものとなる。そういう日の晴ればれとした気分を知らない人があるだろうか。いま私はその気分を味わっていると言いたいが、まだ早すぎる。これが本当の出発になるかどうか分からないまま、一歩を踏み出したにすぎないからである。気重(きおも)な、暗い道に、私は読者をさそいこむかもしれない。曇天、悪天よりも、快活で自在な、見通しのよく利く晴天を好まぬ人はない。それをのちの大きな楽しみとして、しばらく我慢してくれる人が読者であってほしいと思う。

伊東静雄のことを考えるというのは、私には、彼が書いた詩を彼みずからまとめた詩集のなかで考えるということにひとしい。当然ではないか。だが、あえて言うなら、伝記家、書誌家の手によって伊東静雄は撫でまわされて黒光りしているが、彼の詩そのものは白い状態のまま取り残されている。これを詩人の幸福と称することができるかどうか。彼の詩は、そとまわりの夜警番が、鉱物学者か何かのまねごとに銃尾で突っついた城壁のように、ところどころ剝がされ、崩れて、穴をあけられている。けれども、テクストは、そのために傷つけられたり湮滅したりしているわけではない。手近な文庫本が一冊あれば、だれの手にも彼の詩はもとの状態

で渡る。だれの目にも、余白に囲まれたテクストの天守閣はもとのままそびえているだろう。それなら、詩人の幸福もまた守られているということができる。読者の幸福、また然り。われわれにはお城入りする楽しみ、攻略し発見する快楽が残されているわけだ。

だが、相手は慎しみ深い詩人である。つねに一貫して含羞を秘めている詩人。そのために不遜の外見を装うことのある詩人。語らないことで語り、歌わないことで歌うこの詩人の流儀に馴れないあいだは、彼が煙幕使(ミスティフィカトゥール)いのように見える恐れなしとしない。

耀かしかつた短い日のことを
ひとびとは歌ふ
ひとびとの思ひ出の中(なか)で
それらの日は狡(ずる)く
いい時と場所とをえらんだのだ
ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろごり
ひとの目を囚(とら)へるいづれもの沼は
それでちつぽけですんだのだ
私はうたはない
短かかつた耀かしい日のことを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

さいごの一行をそのまま表題とするこの詩を、彼はかような言い方で閉じる。狡い席取り競争をする余地のない満席のなかに、すべての席にいる「短かかつた耀かしい」日々のうたう歌が、「沼」にかわって宇宙にひろがるとき、どうして「私」が「彼ら」を、それらの日々を、詩にする必要があるだろう。「私」は詩の扉口に立って、歌に耳を傾けさえすればいいのだ。「けふの日」を体験した「私」に聞こえるものはただ、「私」をうたってくれる「彼ら」の歌である。「私」の体験無しにはあり得ないはずの「彼ら」の歌。「私」の「沼」の体験無しにもまたあり得なかったその歌。

右の詩から私が感じ、私が考えることは、これで尽きているわけでは決してない。冒頭の一行「耀かしかつた短い日」が、おわりに再度あらわれるときには語句の逆転によって「短かかつた耀かしい日」と変って実現している音韻の変化（カ行の後退と抵抗）およびリズムの変化の妙によって私がみちびかれる方向には、音楽が私にあたえるのと同質の経験領域がひらける。詩句の伝える意味とは別に、意味上の諒解が完了したのちにも猶、依然として残存し、揺曳しているものがある。それはこの詩が展開の仕方によって創出した形式（フォルム）、したがっていつでもこの詩によって確実によみがえる形式が私にあたえる充実と解放につながっている。いまいう充実も解放も、適切に言い表わされた意味からくるのではなくて、ある状況のもとで事物の示す

姿、事物の面貌に対して、われわれがとり得る適切な態度、身の処し方が、詩によって伝えられることから生じた充実と解放である。私がこの詩によってあらたに知ったのは、言語の一組織体、ひとつのシステムになった一篇の詩による、ひとつの定義というべきものだ。それは論理的な定義とは別のものであり、他の芸術（音楽、彫刻、絵画、建築、舞踏、祭式）に伍して、詩が、それ自体によって実現した事物の定義である。時間のなかを刻々に動いてゆくこの定義を、時間に沿う私の身体が、然るべき姿勢をたもつことで支え、定義を体験する。ここに詩は、新しい体験というものになる——読者にとっても、詩人自身にとっても。

其れで遊んだことのない
おれの玩具の單調な音がする
そして おれの冒險ののち
名前ない體驗のなり止まぬのはなぜだらう

（『田舎道にて』）

鳴りやまない「名前ない体験」に名前をあたえるのがこの詩人の詩作であった。言語の始源にあり、言語とともに古い隠喩が復活し、物の通常の呼び名を放逐すると、物の世界にあるとみえた秩序がけしとぶ。未開の自然が出現して詩人を驚かせ、おびやかし、われわれを驚かせ、おびやかす時代がよみがえる。絶対言語が、雲母に掩われた岩盤のように、詩人の精神から放

たれる光に照らされて、在り処をあかす。詩人の語る言葉は、物そのものと同様に見透せないものとなり、なぞめいた言回しが、物のまわりにまつわり付く。そういう言回しを手がかりに、われわれは物のまわりをめぐり、手でさわれる物を相手にするかのように詩人の言葉にさわり、堅さ、重さを計り、へこむかへこまぬか、平滑かザラザラしているかをたしかめる。遠くのほうに稲妻がきらめくと、一瞬、雲がうかび出る。下方には海、森林、泉、水流、草むらが光り、都会の横顔が、また地平の闇に沈む。吹く風を追うように、詩人は隠喩のあとを追う。

田舎を逃げた私が　都會よ
どうしてお前に敢て安んじよう

詩作を覺えた私が　行爲よ
どうしてお前に憧れないことがあらう

（『帰郷者反歌』）

狂暴な、黙示録的な隠喩の世界に耐えようとして、苦しさのあまりに叫ぶ詩人の声は、いのち綱をたぐり寄せようとする難破船客の声のように痛々しい。だが、絶望を知らないあいだの希望とは何だろうか。

私が愛し
そのため私につらいひとに
太陽が幸福にする
未知の野の彼方を信ぜしめよ
そして
眞白い花を私の憩ひに咲かしめよ
昔のひとの堪へ難く
望郷の歌であゆみすぎた
荒々しい冷めたいこの岩石の
場所にこそ

（『冷めたい場所で』）

「名前ない体験」に名前をあたえるこの試みは、危険な孤独のなかでくり返され、詩人を狂気に近づけるのではないか。われわれは成行きをこわごわ見守る。けれども、人間は、かように大胆不敵な詩作をひとりの相手もなしに孤独にくり返すようには出来ていない。詩人は「私が愛し／そのため私につらいひと」と言っている。この人影は何者か。悪魔は心をとろかす美女の姿をとって荒野の修道士をしばしば誘惑することがあった。われわれの詩人は、彼もまた、誘惑者を相手に持つがゆえによく孤独から免れているのだろうか。だが、聖アントニウスの同

類を彼にみとめるのは、おそらく見当違いだろう。詩集『わがひとに与ふる哀歌』も、詩集中の同題の詩も、「わがひと」を女性と受け取らなくてはならないような措辞を注意深く回避していることに対して、人は少しも注意しなかった。伝記家の思い込みが広まったのだ――「ただ一つの沼」のように。「わがひと」は、「私」の分身、ドッペルゲンガーとしてあらわれているのだと私には思われる。もうひとりの「私」＝「半身」を愛している「私」のドラマが、物に新たな名を付けるという古くして新しい行為、ほとんど暴行に似た行為に専念し、隠喩の猛吹雪のなかに身を曝すことになったおかげで年齢を欠き、血の気も失せたひとりの呪術師に変貌して自分の顔をうしなっているこの詩人に、人間の苦悩と悦びをよみがえらせる。悦びはただちに忍苦の諦念に似た、氷の炎の色に染まるにしても――

あゝ　わがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでゐる
音なき空虚を
歴然と見わくる目の發明の
何にならう
如かない　人氣(ひとけ)ない山に上(のぼ)り
切に希はれた太陽をして

殆ど死した湖の一面に遍照さするのに

（『わがひとに与ふる哀歌』）

この日本のヒュペーリオンには、影の形に添うごとく「私」に随伴している「私」の分身、ひとりのベラルミンは、どうにか存在したように思われる。だが、ついにディオティーマは見出されない。彼女は影であってはならない。恋愛の対象が、男のほうからも、女のほうからも、最も高揚したイデアの実現に一致するようなことは、事を載せ、道（思想）を載せて運ぶ言語がそれを可能にしなければ成り立たない。この可能は、われわれの日本語が今も昔もよくなし得ることではなかった。ディオティーマ、即ちズゼッテ・ゴンタルトがヘルダーリンにあてた十数通の手紙の邦訳は、日本語で書かれた手紙というものではない。隠喩がよく用いられるわけでもなく、論理学の演習があるわけでもない平明な文章。だが、情を尽し、理非曲直を分かって、ああいう手紙が、魂から魂に向けて日本語で書けないなら、われわれはディオティーマの手紙をまえに黙座し、口惜し涙に暮れるほかはない。伊東静雄は『ヒュペーリオン』にしばしば霊感を仰いだ。霊感は待つすべを知っている人にやってくる。彼は時と場所を周到にととのえ用意して、ヘルダーリンの表現がまれびとのように収まるのを待った詩人である。もとはドイツ語育ちの語、語句、隠喩は、収まるべき文脈において伊東静雄の詩中に収まり、更紗の捺染のように織布と和解し、ひとつに融合した。われわれはやがてそういう実例を見るだろう。しかし、恋愛にかかわる表現は別である。待つことから書かれた相手の手紙に対して、収まる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com